

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：34301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00862

研究課題名（和文）タスク条件がもたらす日本人英語学習者のスピーキングへの影響

研究課題名（英文）The impact of task conditions on the English speaking ability of Japanese students

研究代表者

西川 幸余（Nishikawa, Sachiyo）

大谷大学・国際学部・准教授

研究者番号：60720688

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000 円

研究成果の概要（和文）：日本人大学生が「積み上げ式繰り返し学習」の条件でストーリー・リテリング・タスクに取り組み、文字インプットを基に話す場合は、モデル文の参照過程を経て語彙・文法面の正確な発話への自己修正を促す傾向があり、絵のインプットを基に話す場合では、複雑な発話文の産出や発話中の自己の気づきによる文法修正を促進することが明らかになった。積み上げ式提示方法で学習者はタスクに取り組みやすくなるだけでなく、インプットに基づく発話の繰り返しはプライミング効果のためより正確な発話産出につながっている。「インプット」と「繰り返し学習」の2条件は、英語指導で学習者の発話向上を目指すスピーキング・タスクの考案に役立てられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「繰り返し学習」による第二言語習得に関する研究は、期間をあけて繰り返す条件や瞬時に繰り返す条件で調査されてきた。本研究では、後者の条件に加え「積み上げ式」学習方法をタスク・デザインに取り入れ、学習者のタスク活動時の認知負荷量を軽減する工夫を図った。さらに「積み上げ式繰り返し学習」によるスピーキング・タスクは、学習者のインプットやアウトプットに対する気づきを促し、発話向上につながる。本研究成果は、「積み上げ式」による繰り返し学習が新たな実践的指導方法として有用なだけでなく、学習者の意欲と発話力の向上を促すスピーキング活動の提案につながる点において意義がある。

研究成果の概要（英文）：The current study revealed that when Japanese university students performed a story retelling task under the condition of “accumulative task repetition,” the students who received textual input tended to self-correct their speech output through the process of referring to model texts, whereas the students who were given pictorial input appeared to produce complex utterances and to correct their grammatical errors due to noticing linguistic features in their oral output whilst formulating utterances.

The approach of accumulative presentation of input appears to help learners engage in a speaking task more easily. Repetition of the oral output based on provided input task leads to distinctive improvement in speech due to the priming effect. These two conditions - input and task repetition - can be useful for teachers and researchers in developing speaking tasks that help learners improve their speaking skills.

研究分野：外国語教育

キーワード：英語教授法 スピーキング 繰り返し学習 タスクベース学習 インプット条件 学習者の気づき

1. 研究開始当初の背景

学校教育現場では、学習者の目標言語知識を定着させ言語習得を促すことを目指し、繰り返し読む、聞く、話す、書く言語活動が実践され、「繰り返し学習」の有効性は広く認識されている。「繰り返し学習」による第二言語習得に関する代表的な研究には、Bygate (1996) による期間をあけて繰り返す条件 (delayed repetition) で3日後の発話の変化に関する調査や、Lynch & Maclean (2001) のポスター・カルーセル方法を用いて瞬時に繰り返す条件 (immediate task repetition) でのポスター発表発話の変化に関する調査がある。第二言語習得では、重要な要因となるインプットからアウトプットへの過程のモデル理論 (Izumi, 2003) が示唆するように、スピーキング活動における補助教材として「インプット」の使用と「アウトプット」を促す言語活動は言語形式を取り込むことにつながり、言語習得の促進が期待される。異なるインプットが発話に至る言語処理過程を示す Model of Single Word Processing (Martin & Wu, 2005, p.384, Figure 17.1)では、インプットには (1)音声、(2)絵(画像)、(3)文字の3種類があり、それぞれのインプット情報が意味システムを経て(時には意味システムを通過せず) 音声情報を引き出し発話にいたると示している。学校現場での英語スピーキング練習では、音声を聴いてから話す、絵や画像を見てから話す、文字を読んでから話すという一連のインプットからアウトプットにつながる言語活動を通じて、スピーキング力の向上を目指す指導が行われていることから、インプットが発話に与える影響について調査することとした。

これらの言語習得を促す2つの主要因(「繰り返し学習」と「インプットの活用」)を考慮して、スピーキング・タスクを用いた自己の先行研究 (Nishikawa, 2011) では、タスク条件の主要因に「繰り返し学習(1週間後)」と、「2種類のインプット(リ・ディング、リスニング)」に焦点をあて、大学生の発話への影響について調査した。発話データを用いた定量分析結果では、第1週と第2週の発話の比較に関して流暢さと正確さの点で統計学的に有意であり、繰り返し学習に関する先行研究結果の「流暢さの向上」と「正確さの向上」に一致した。インタビュー・データを用いた定性分析結果では、繰り返し発話することで、学習者の注意はより細部へ移り、インプットやアウトプットの際、一層正確さに意識して取り組もうとする「気づき」が促されていた。つまり、「繰り返し学習」が情報処理量の増加につながった点が明らかになった。しかし、「繰り返し学習」に関する先行研究は、同じ内容のタスクを繰り返した場合を検証するもので、スピーキング活動時、学習者の情報処理量の負担に関して考慮されていない。この点を改善するために、タスク内容を分割提示する「積み上げ式繰り返し学習 (accumulative task repetition)」方法で、学習者の発話への影響を調査する必要があることに着目した。

更なる研究として、教育現場で実践可能で効果的なタスク考案には、インプットの役割を理解する必要があり、「絵のインプット」と「文字のインプット」の使用をスピーキング・タスクの条件として比較し、どのような発話を引き出し、発話向上につながるのか明らかにすることが重要と考えた。

2. 研究の目的

本研究では、2つのインプット条件(絵のインプットと文字のインプット)を用いて「積み上げ式繰り返し学習」方法による英語発話への影響を調査することが目的である。従来の同じ内容を単に繰り返すタスクとは異なり、この学習法では、学習者が最終的に達成すべきタスク内容をあらかじめ分割し、少しずつ提示しながら学習者に取り組ませるのが特色である。今回のタスク・デザインでは、学習者は1回目に4分の1のインプットを受け取り、タスクを繰り返すたびに4分の1インプットが追加され、最終回の4回目では、すべてのインプットを受け取り、スピーキング・タスクを完了することになる。

この「積み上げ式繰り返し学習」により期待される利点は、学習者の情報処理の負担を軽減するだけでなく、既に取り組んだ内容と新しい内容について話すことにより、繰り返しによる退屈さを感じさせることなく、むしろ「積み上げ繰り返し部分」がより流暢で、より複雑に、より正確な発話を促すと考えられる点である。タスク・デザインの特徴である、学習者がインプットの増加に伴い少しずつ発話量を増やすことで、自己のインプットの理解度と発話の正確さについて自ら気づける機会が提供され、自己修正を促し発話の質的向上につながるだけでなく、タスク活動への自己達成感や英語発話への自信の構築につながり、学習意欲の向上が予想される。さらに、2つの異なるインプット使用により、絵のインプットの場合、自由な発想で詳しく話そうとするのでより複雑な発話を促し、文字のインプットでは、モデル文を参考に発話できるためより正確な発話を促すことが結果として予想される。

2つの異なるインプットの役割と積み上げ式繰り返し学習による発話への影響について、当初は、2グループの発話分析から得られた測定値を用い、流暢さ、正確さ、複雑さの3観点から違いがあるのか、また、繰り返すことにより発話に変化があるのか、定量分析を計画していた。しかし、参加者が予定人数に若干足りないため、もう一つ予定していた定性分析を優先して行った。この質的分析では、2つの主要因に対する学習者の認識を解明することを目的とした。

(1) 学習者が自己のタスクの取り組みについて振り返ることで、どの程度「インプットの役割」

に対する認識を示すのか明らかにする。

(2) 学習者が自己のタスクの取り組みについて振り返ることで、「積み上げ式繰り返し学習の効果」に対してどのような気づきを示すのか明らかにする。

英語指導では、言語知識の定着を図りながら発話の向上を目指すスピーキング・タスクの考案が重要であることから、2つの主要因に対する学習者の認識を解明することで、インプットとなる教材の効果的な活用方法や、言語活動時の学習者の認知負荷を軽減する分割提示にもとづくタスク繰り返し学習の指導方法がより具体化され、学校教育現場で求められる実践的英語指導の工夫と改善に役立てられる。

3. 研究の方法

(1)参加者

本調査では、大学生を対象に研究調査の参加者を募集し、個別に面談形式で英語によるストーリー・リテリング・タスクに取り組んでもらい、タスク終了直後に、タスクの取り組みに関する振り返りインタビューを日本語で行った。参加者にはスピーキング・タスクとインタビュー終了後に謝礼を渡している。

(2)研究デザイン

自己の先行研究で使用した教材を本研究でのタスクのインプットとして活用し、2種類のインプット(絵と 文字)を準備した。インプットの役割を調査するために、(1)漫画の絵を見てから話すグループと(2)英文を読んでから話すグループの2グループを編成した。グループ1は絵のインプットを受け取り、グループ2は文字のインプットを受け取り、両方のグループは「積み上げ式繰り返し学習」の条件でストーリー・リテリング・タスクに取り組んだ。2種類のインプットはそれぞれ4つに分割して、予備調査で割り出した時間設定でインプットを積み上げ式で提示し、参加者はタスクを3回繰り返した。直後に、タスク活動を振り返り、2つの主要因に関して気づいた点を話してもらうインタビューを実施した。

(3)データ収集

分析データは、(1)スピーキング・タスクの英語発話と(2)振り返りインタビューの日本語発話の2種類で、同意を得て参加者全員の発話をICボイスレコーダーで録音して収集した。2種類の発話データはすべて書き起こして文字化し、2つの主要因である「インプットの役割」と「積み上げ式繰り返し学習の効果」に焦点をあて定性分析に用いた。

(4)分析方法

質的研究では、参加者が提示されたインプット(絵、あるいは 文字)をもとに積み上げ式繰り返し学習の条件でスピーキング・タスクに取り組むことで、タスク活動中の自己の言語運用と産出への気付きや、英語発話における質的や量的変化への認識について、どの点に注意しながらタスクに取り組み、具体的に何に気づけているのか、インタビュー・データを次の方法で分析した。

最初に、書き起こされたインタビュー・データの原稿を読み込み、Excel ファイルを用いてまとまりのある文を入力してそれぞれの文をコード化した。次に、類似するコードをまとめてカテゴリーを生成した。学習者の視点にもとづくスピーキング・タスク活動での(1)インプットの役割と、(2)分割提示での積み上げ式繰り返し学習に基づく英語発話への気づきとその効果に焦点をあて分析した。さらに、インタビュー・データの定性分析結果から明らかになった点について、実際に話された英語発話文にはどのような言語運用の現象がみられるのか確認するために、書き起こした英語発話データを併用して、各カテゴリーに該当する英語発話文を抽出して言語産出はどう変化しているのか考察している。

4. 研究成果

2つの異なるインプットを用い、積み上げ式繰り返し学習方法でスピーキング・リテリング・タスクに取り組んだ2グループ参加者のタスク活動への認識に関する定性分析と、学習者の言語運用の気づきに該当する発話文の抽出確認作業を経て、2グループの認識には言語運用面において類似点と相違点があることが明らかとなった。各グループのインプットの役割、並びに、積み上げ式繰り返し学習に対する認識についての分析結果の概要は次のとおりである。

(1)インプットの役割

2グループによるインプットの役割に関する認識として、次の6つのカテゴリーが生成され、情報源、注意、認知的負荷、想起(memory recall)、気づき、インプットへの志向において、相違点や類似点がみられた。グループ1(絵のインプット)が示したインプットの役割に関する認識には、情報源は「視覚情報」であり、視覚情報を通じた言語活動では「絵が媒体」となることから、文字情報より記憶に留まると指摘があった。タスク活動時の注意は、主

に「文法」に向けられていたとの認識があった。 認知的負荷について、絵のインプットのタスクでは、絵が示す「物語の流れ」を考えながら、同時に自分で英文を考える2つの作業があったため、いくつかの情報を忘れてしまい混乱が生じたという認知的負荷の認識が明確に見受けられた。 想起に関して、簡単な「英単語」を記憶から引き出したり、文章の流れを作る適切な「接続詞」の選択を検討したりしたことが指摘されていた。 気づきについて、日本語による考えは増加していくのだが、発話の向上がそれに伴っていないという認識が見られた。 絵のインプットに対する志向について、絵を見てから話すタスクは、自分がどの程度単語を話せるのか自己の英語力を知る機会になるため良いという意見や、考える力につながるという意見があり、絵を見て話すタスクを望む参加者が比較的多く見受けられた。

これに対し、グループ2（文字のインプット）が示したインプットの役割に関する認識には、情報源として受け取った文字インプットが、モデル（手本）となった点について指摘があり、具体的には、語彙、前置詞、冠詞、句動詞、接続詞、過去完了形、主語と動詞がモデルとして認識されていた。 文字インプットから理解して得た情報が、頭の中で「イメージ」に変わっていくという現象の指摘があった。 認知的負荷について、英文を読むタスクでは、英文翻訳はしていなかったが日本語で表現が浮び、頭の中で英語表現を探しながら同時に物語を思い出すという2つの作業を行っていたため、話すとき速度が遅くなり上手に話せなかったという認識があった。 想起に関して、英文を読んでいるため、読んであった英単語を発話時に思い出せたという認識が多く報告された。この認識は、先に体験したことがその後の行動に影響を与える現象である「プライミング効果」(McDonough & Trofimovich, 2009) について言及していることになる。他に、単語に関して、文中に出てきた知らない単語(動詞の trip)が発話で使えていたことや、文中の知らない単語は発話時に使用を避けたことや、発話時に単語の置き換えを行なったことが認識されていた。 気づきについて、英文理解量は増加していくが、発話の向上がそれに伴っていないことや、自由に話せるときは英語で話せるのだが読んだことをもとに話すタスクではうまくできないことに気づきを示していた。 文字インプットに対する志向では、モデルとなるインプット（英文）を基にスピーキング練習ができるのは良いという意見がある一方で、絵をもとに話すスピーキング・タスクであれば自由に話せるため絵のインプットの方を好む意見も見られた。

(2)積み上げ式繰り返し学習の効果

積み上げ式繰り返し学習の効果に関する2グループの認識として、次の5つのカテゴリーが生成され、詳細への注意、想起(memory recall)、再話の向上、タスク取り組みの変化に対する気づき、タスク・デザインへの志向において相違点や類似点がみられた。グループ1（絵のインプット）が示す積み上げ式繰り返し学習の効果に対する認識には、詳細への注意について、漫画の絵のコマとコマの間を読み取り理解すること、すなわち「閉合(closure)」(McCloud, 1994) において回を重ねるにつれて難しくなると認識されていた。他に、繰り返すことで、気づいていなかった視覚情報に注意するようになったり、自己の発音について自分でモニターしたりするようになったと認識していた。 想起について、繰り返すことにより徐々に単語や文法を自己の記憶から引き出せていたと認識があった。 再話の向上に関しては、単語の検索、発話の自己修正、流暢さにおいて改善されたと認識していた。 タスク取り組みの変化に対する気づきでは、話すたびに違うように話しており、その都度新しい文法で英文を作っていたため、流暢さは全く向上していないという認識があった。 タスク・デザインへの志向について、積み上げ式で繰り返す方法では、次に何が起こるのかと楽しみながらタスクに取り組んだという意見があった。

これに対し、グループ2（文字のインプット）が示す積み上げ式繰り返し学習の効果に関する認識には、詳細への注意について、文法、接続詞、文字と音声の一致という点により注意するようになり、さらに、注意しようとする焦点の変化についても認識されていた。 想起に関して、タスクを繰り返すことで「記憶の増加」と「新しい情報の追加」により自己の発話文の拡大、つまり、1文が長くなっていることについて認識されていた。 再話の向上では、発話文の変化に気づいたり、発話時に自分で間違いに気づき自己修正して話したり、発話が流暢になっていたと認識があった。 タスク取り組みの変化に対する気づきでは、発話の正確さが変化したこと気づいたり、情報量の増加により覚えていない部分の話の順序について混乱が生じたりしたと認識していた。 タスク・デザインへの志向に関して、一度にすべての文章を受け取り取り組むのではなかったのが、話しやすかったという意見があった。

(3)考察

2つの異なるインプットを用いたスピーキング・タスクの情報処理量に関して、文字インプットをもとに話すタスクでは、まず英文を理解して情報整理をしたうえで話すことが求められるため、絵のインプットをもとに話すタスクより認知的負荷がかかる傾向にある。しかし、文字インプットはモデルとなる英文を提供するため、プライミング効果により発話時に文字インプットの情報がモデル英語としてある程度記憶から引き出すことが可能となり、自己の発話文の正確さに注意を払い話せたことから自己の発話向上について認識する傾向がみられた。

繰り返しによる英語発話への効果について、タスクをすぐに繰り返すことで、直前の自己のタスク取り組みについて振り返る機会を得ることにつながり、インプット時に発話で自分が必要

となる情報に注意しながらインプット情報を読み取ることを促している。アウトプット時では、得られたインプット情報を発話文に取り入れようとするため、タスク活動中はより詳細な点に注意が移り、自分の気づきを活用して自己の発話を観察(monitor)することができていた。

教材を分割して積み上げ式で提示する繰り返し学習でのスピーキング・タスクは、タスク活動を繰り返すたびに自己の発話の出来具合について瞬時に振り返る機会を提供する。そのため自己の取り組みに対する気づきを促すだけでなく、インプット情報で発話に必要なと気づいた情報を収集して英文を考え、発話時に気づきをもとに発話の自己修正を促すことから、発話の向上に対する認識にもつながるようである。英語発話の改善という肯定的な気づきや今後学習を要する具体的な点についての気づきは、さらなる自律的英語学習への動機付けにもつながると考えられる。

(4) 研究成果の意義とその応用

学習者の英語発話における流暢さ、正確さ、複雑さの観点からスピーキング力の向上を図るには、インプットの役割と積み上げ式繰り返し学習の効果に着目し、学校現場の英語指導での使用教材をインプットとして用いてアウトプットにつなぐストーリー・リテリング・タスクによる言語活動を考案すると効果的な指導につながると考えられる。本研究結果から、実際の授業指導で、少しずつインプットを提示することで情報処理量の軽減を図り、少しずつ英語情報を取り込みながら理解できる部分を増やし、取り込んだインプット情報をもとに話してみることで学習者ができる部分とできない部分について気づくことができ、より上手に話すために必要な学びは何か自ら気づかせる学習の場の提供につながると示唆を得ることができた。

発話の「正確さ」の向上を図るタスク考案には、文字インプットを用いてストーリー・リテリング・タスクに取り組み、モデルとなる語彙や文構造などを自己の発話に取り込み発話する機会を提供するとよい。さらに、タスクを繰り返すことで、正確に話すために必要な情報を探そうと細部に注意が向けられるため、より正確な発話につながり自己の発話向上にも気づける可能性がある。

発話の「複雑さ」面での向上を図るタスク考案には、絵のインプットを用いて自由な発想で話の流れを創造させ英語で発話する機会を提供する。繰り返してタスクに取り組むことで、より詳しく話すために自己の現存言語知識から使える単語を引き出すだけでなく、統語的に複雑な文を考えようということから、発話文は1文が長くて複雑な文構造になり質的や量的に発話の複雑さが増し、発話向上に対する気づきを促すことにつながる。

繰り返し学習は、スピーキング練習に取り入れた場合、学習者が必要とする情報に対して注意を細部へと移すことを促すため、インプットとアウトプットの活動時に語彙や文法などの言語的要素に対する気づきが徐々に増し、この気づきの増加が言語運用と産出で役に立ちスピーキング力の向上を可能にする。

本研究成果は、2021 年国際学会でのポスター発表にて、タスク学習でのインプットの役割と繰り返し学習の効果に関して、学習者の視点からタスクの取り組み方と気づきに関する質的分析結果の考察から、タスクベース学習の研究分野に新たな要因の「積み上げ式繰り返し学習」を提起することができた。2022 年学内学会での口頭発表では、本研究のタスク・デザインが「インプット条件」と「繰り返し学習方法」にもとづくスピーキング練習であることから、発話の変化と向上にどう影響したのか、発話文データから生成力カテゴリーの該当事例を抽出して、具体的に発話変化を可視化して共有でき、タスク・デザインの重要性和その効果について発信している。2023 年研究発表要旨を論文にまとめ、質的分析結果から得た効果的なタスク・デザインの要因と英語指導における活用について示唆した。

<参考文献>

- Bygate, M. (1996). Effects of task repetition: Appraising the developing language of learners. In J. Willis & D. Willis (Eds.), *Challenge and Change in Language Teaching* (pp. 136-146). London: Heinemann.
- Izumi, S. (2003). Comprehension and production processes in second language learning: In search of the psycholinguistic rationale of the output hypothesis. *Applied Linguistics*, 24(2), 168-196.
- Lynch, T., and Maclean, J. (2001). 'A case of exercising': Effects of immediate task repetition on learners' performance. In Bygate, M., Skehan, P., and Swain, M. (Eds.). *Researching pedagogic tasks: Second language learning, teaching and testing* (pp.141-162). Harlow: Longman.
- Martin, R., & Wu, D. (2005). The cognitive neuropsychology of language. In K. Lamberts & R. L. Goldstone (Eds.), *Handbook of Cognition* (pp.382-404). London: Sage.
- McCloud, S. (1994). *Understanding Comics: The Invisible Art*. New York: Harper Perennial.
- McDonough, K & Trofimovich, P. (2009). *Using Priming Methods in Second Language Research*, NY and London, Routledge.
- Nishikawa, S. (2011). *The Impact of Mode of Input and Task Repetition on Story Retellings in Second Language Learning*. [Unpublished doctoral dissertation]. Lancaster University.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Sachiyo Nishikawa	4. 巻 第102巻第2号
2. 論文標題 The impact of immediate task repetition on L2 learners' narrative speech production	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大谷学報	6. 最初と最後の頁 17 - 26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件／うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Sachiyo Nishikawa
2. 発表標題 L2 learners' awareness of narrative speech production under accumulative task repetition
3. 学会等名 Task-Based Language Teaching in Asia 2024（国際学会）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 西川幸余
2. 発表標題 即時繰り返し学習による英語発話への影響
3. 学会等名 2022年度 大谷学会研究発表会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Sachiyo Nishikawa
2. 発表標題 L2 learners' awareness of the role of input and immediate task repetition
3. 学会等名 British Association for Applied Linguistics 2021 Conference（国際学会）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------